百々裏話（41）

おもて　あきら

〔音曲道歌雑考〕

＊漢数字は本稿掲載道歌の通し番号、算用数字は当該道歌群中の歌順を示す。

(2) **音阿弥百首系道歌**

最も広く流布した音曲道歌は、音阿弥に仮托されていることの多い百首道歌であらう。既に紹介した歌仙系道歌と同じ歌も含まれているが、これは全部の歌を翻印しておく。他にも写本は多いが、今回参照したのは、内閣文庫蔵『音曲百首』（永禄三年暮松伝書と合写され、音阿弥に仮托せず）と、鴻山文庫蔵の『観世音阿弥百首道歌』（天正九年奥書本の転写）と、観世宗家蔵『音曲秘伝書並百首詠』（音曲口伝と合写。江戸初期写。音阿弥仮托）の三種である。

1、音曲の道とやならんもしほ草
　かき集めたる手すさみの跡　（一）

2、音曲はただ大竹のごとくにて
　直ぐに清くて節すくなかれ　（四）

3、音曲を直によきとは何事ぞ
　字訛りといふことは稀なり　（二二）

4、音曲は阿吽の二字にはづれめや
　阿吽の心物ごとにあり　（二二）

5、音曲を極むる程の者なりと
　なほ奥深き事をなむせよ　（二三）

6、音曲に息つぎこそは大事なれ
　大小音に限るべからず　（二四）

7、音曲の重き軽きとしたるきと
　早き遅きの程は知らずや　（二五）

8、音曲の早きかろきは似たれども
　早き軽きは心ちがひや　（二六）

9、音曲は所望によりて謡ふべし
　さなくば常にあることをいへ　（二七）

10、音曲の節を極むる者なりと
　惣にはづれて節だてなしそ　（二八）

11、我が声の届かぬ事を知らずして
　長き事をば謡ふべからず　（二九）

12、我が声の程をも知らで高調子
　末も通らぬ事ぞかしき　（三〇）

13、我が声の出でばつかひて色をなせ
　出でずば声につかはれやせん　（三一）

14、我が内もあたりを恥ぢて誕ふべし
　心ゆるして謡ふべからず　（三二）

15、生得に濁れる字をば濁らかせ
　清む字を濁すことは有るまじ　（三三）

16、大きにて良からん声は小さくて
　小さくねがふ字は大きなり　（一七）

17、口の内重き軽きの心得は
　心の悟り舌のさへづり　（一七）

18、さし声もさしごとまでも数をば
　捨てぬ道理を知らぬはかなさ　（三一）

19、しらことと声とことばの声ざしの
　替る心を知る人ぞなき　（二〇）

20、声のうら表といふを知らずして
　出るをばかりに謡ふべからず　（六二）

21、能謡座敷小路もいろいろに
　分きて心の持るべきなり　（六三）

22、口と舌心の三つのかなひてぞ
　口舌心の音曲といふ　（二一）

23、切拍子切らず拍子にみな謡ふ
　切によりたる儀理は知らずや　（二二）

24、論議こそやすく聞えて大事なれ
　問ふに答ふる程を知らずや　（一一）

25、謡ふとき扇拍子ぞ大事なる
　無用を打てば用に立たずや　（六）

26、謡ふ時身もち顔もち口癖は
　常に鏡に向かひても見よ　（五）

27、我が声を三色四色につかひなし
　心やすくも音曲をせよ　（一六）

28、暁に限らぬものをつかふ声
　常にうたひを謡ふべきなり　（六四）

29、声よくと拍子に合はぬ音曲は
　道にはさらに用に立たずや　（六五）

30、声出でず小音なりと音曲を
　習ひて謡ふ人はよきなり　（六六）

31、出でぬより猶出る声の音曲の
　よこしまなるぞ笑止なりける　（六七）

32、初めたる所へ行きて謡ひなば
　主人の名字名のり問ふべし　（二六）

33、謡はんにまづ祝言をもつぱらに
　さて其後は恋慕哀傷　（七）

34、かりそめも謡はん時は気をつかへ
　壁に耳あり岩に口あり　（六八）

35、謡ふ時調子ばかりを音取りにて
　吹きだてをして吹くな尺八　（一四）

36、節ごとにその流々の有るなれば
　心許して謡ふべからず　（六九）

37、それぞれの座により節の替るぞと
　ひとりまじらば惣なみにせよ　（七〇）

38、堪能のわざには何と謡うべき
　人の所望は闌曲をせよ　（八）

39、我が声に迷うて謡ふその人は
　音曲だての節知らずなり　（七一）

40、我が心ただ井の内のかはづにて
　海山知らで人な笑ひそ　（三五）

41、その人の弟子といひたるばかりにて
　なさぬうたひに師の恥をいふ　（三四）

42、皆人の初めはかりを習ひつつ
　奥をば知らで功者ぶりする　（七二）

43、我だにも習ひ極めぬ事どもを
　まして他人に教ゆべからず　（七三）

44、何事も知らず顔なるふりをせよ
　問はず語りはなほ無益なり　（七四）

45、人中で習はぬ事はすべからず
　ひとりの恥は万人の恥　（七五）

46、初心にて役を望むぞ無用なる
　なかなかせぬは奥深きなり　（七六）

47、晴れの役前に稽古をよくなして
　其後は心ゆる〳〵と持て　（七七）

48、利根にて物を習はぬその人は
　鈍には劣る心なるべし　（七八）

49、無器用と人はいふとも稽古せよ
　習はぬ事はせられざりけり　（七九）

50、習ひても稽古せざれば曲もなし
　稽古に不思議神変そある　（八〇）

51、物をよく習ひ覚ゆと思ふとも
　心がけずば磨かざる玉　（八一）

52、心にも好かざる事は習ふまじ
　水に絵を書く如くなるべし　（八二）

53、何事も好ける初めの心こそ
　やがてし習ふもとひなりけれ　（八三）

54、師匠にも問はずばいかで教ゆべき
　心を砕きねんごろに問へ　（八四）

55、声なくて謡を稽古する人は
　ゐ口のうそとこれを言ふなり　（八五）

56、何事も工夫にまさる事あらじ
　習ひの上の工夫なりけり　（八六）

57、折り〳〵に貴人の前に近づかば
　身をたしなみて謹みて居よ　（八七）

58、何事も我と許すぞをかしけれ
　人も許さぬ印可だてすな　（八八）

59、さしよりて謡ふ調子は双調か
　後は黄鐘盤渉もよし　（八九）

60、謡はんに調子を低く吟じつつ
　短きことを先づ謡ふべし　（九〇）

61、寄り合ひて謡はん時はその中に
　初心の者は耳をあくべし　（九一）

62、何事も我ばかりぞと思ふまじ
　一和尚に事は欠かんや　（九二）

63、我ばかりす抜くる事は無用なり
　ひとり高名ならぬものなり　（九三）

64、吹き物のなき座敷にて五調子を
　吟じて謡ふ事は大事ぞ　（九四）

65、出る声の思ひのままに出でざるは
　なま覚えなる音曲ぞかし　（九五）

66、人なみに謡ふふりする口もとは
　人の声取る盗人ぞかし　（九六）

67、何事も譜に固まれる事あらじ
　亭主の好み時のしほあひ　（九七）

68、さしごととさし声替る事ぞかし
　ことばと声と心あるべし　（九）

69、人のする所作をそしるぞ無用なる
たとひ悪くと誉めて置くべし　（九八）
70、人中で異見だてこそ無用なれ
等閑なくば険でいふべし　（九九）
71、憎躰に異見を人の申すとも
わが為よくば聞くぞかしこき　（一〇〇）
72、音曲は軽き心ぞ良かりける
重きもわろしたるきも憂し　（一〇一）
73、かりそめも荒めに謡ふ事あらじ
内ではたけぬ馬のごとくよ　（一〇二）
74、謡ひ出す心はなにと持ちぬらん
主に物言ふ心なるべし　（一〇三）
75、謡ひ出す声をば何と思ふらん
鶯のなく声の如くに　（一〇四）
76、それぞれの位によりて謡ふべし
老若男女僧俗にあり　（一〇五）
77、それぞれに心をつけて謡ふべし
祝言修羅にさては哀傷　（一〇六）
78、稽古をば晴にするぞと思ひなし
晴をば常の心なるべし　（一〇七）
79、あまりまた大事と思ひするわざは
かへりて怪我をするわざぞかし　（一〇八）
80、弱くとも尋常にするわざぞよき
物強ければ賤しくぞ見ゆ　（一〇九）
81、下手こそは上手の上のかざりなれ
何と悪くとそしりばしすな　（一一〇）
82、万代の能を極むる身なりとも
我とわが身を慢ずべからず　（一一一）
83、人はいかに節や拍子を違ゆとも
覚え強くば埒てず言ふべし　（一一二）
84、人ごとに謡を埒つる事あらば
つがひを埒てず謡ふべきなり　（一一三）
85、皆人の強く謡はんその時は
声を休めてまた謡ふべし　（一一四）
86、とにかくに声の出づるぞ音曲よ
声なき者は音曲もなし　（一一五）
87、上手こそ物嫌ひする事ぞなき
様がましきは下手の癖なり　（一一六）
88、当る字と持つ字と引は替るべし
当るは持ちて持つは引くなり　（一一七）
89、音曲にさのみ節だてすべからず
あるべきやうに何となくして　（一一八）
90、目をふさぎあたまを振りて謡ふ人
ただ憎躰に見ゆるなりけり　（一一九）
91、くせをして目に立つわざそ見にくけれ
初心なりともなるなるとせよ　（一二〇）
92、芸はみなけたかく見えて良かるべし
心は下にひくくとあれ　（一二一）
93、覚えたる事をも人に問ふなれば
まして知らずばねんごろに問へ　（一二二）
94、貴命にも覚えぬ事はすべからず
押してするこそ道の怪我なれ　（一二三）

幸流小鼓
手組一覧

定価　二八〇円
〒35円
（一冊ごとに十円増）

幸流常用の手組二〇四種を六項目に分類し、その粒附を列記。完全な索引付。お稽古には必携の瀟洒なハンドブック。A6判・本文二色オフセット刷り・横綴洋装・ビニールケース入



タブロイド版　六頁
月刊・毎月一日発行
一部　五〇円　送料六円
一年六五〇円　送料不要

《九月一日号の内容》第135回能楽対談（森茂好・丸岡明）、三十人会の古典狂言（堂本正樹）、想扇録9（喜多長世）、「本当の芸」について私の言い分（西川道雄）全国の九月演能番組その他

能樂書林
神保町三―六　電話（二六一）〇八一三

95、何事も口伝あるそと心得て
　浅くは物を思ふべからず　（二二四）
96、我いかに初心の者と思ふとも
　人の許すぞ上手なりける　（二二五）
97、但しまたひいき偏執の沙汰あれば
　上手も下手も人の言ひなし　（二二六）
98、我が芸を我と慢ずることなかれ
　人の許すぞ上手なりける　（二二七）
99、何事も法にはづるる事あらじ
　よろづの鳥の囀るも法　（二二八）
100、皆人の心ひとつの悪ければ
　よろづの能の有甲斐もなし　（二二九）

鴻山文庫本は右の百首の内71を脱し、九九首の形、観世宗家本は42・62・85の三首を欠く九七首の形であり、内閣文庫本は、9・55・86の三首を欠き、末尾（98首目）に音曲は夕の月に迷ひ出でて　末は闇路に迷ひこそすれ　（二三〇）の一首が加わった形で、かつ歌順が若干違っている。歌順については前二本を重んじ、歌詞に異同がある場合には、より古色を存していると認められる内閣文庫本の方を重んじて校訂したのが右の音曲百首である。歌仙系道歌との関係などについては、次回に考察することにしたい。　（41・9・1）

≪出演予定≫

9月17日（土）観世会秋の別会第一日（観世会館）能大原御幸法皇（銕之丞）仕舞野守（雅）
9月18日（日）観世会秋の別会第二日（観世会館）仕舞駒之段（幸徳）
同日　大阪根来氏会
同日　名古屋観世会素謡三輪のシテ及び大原御幸のワキ（静夫）
9月22日（木）梅若万紀夫後援会（観世会館）
仕舞野宮（静夫）熊坂（寿夫）
9月25日（日）大江氏先代追善能（京都）能実盛長一九（銕之丞）
9月27日（火）試演の会（水道橋能楽堂）仕舞雀之段（銕之丞）
10月14日（金）古典音楽鑑賞会「語り物の系譜」（三越劇場）舞囃子歌占クセ（銕之丞）
10月16日（日）田辺喜久恵氏会（小田原）能砧梓之出（喜久恵）舞囃子大瓶猩々（銕之丞・寿夫・静夫）
10月17日（月）学生鑑賞能（観世会館）能松風見留（銕之丞）
10月22日（土）横浜観世会（神奈川県立音楽堂）能山姥白頭（銕之丞）
10月29日（土）梅若美雄五十年祭（観世会館）
仕舞道明寺（静夫）一調小督（寿夫・幸祥光）
10月31日（日）山口荷風会（銕仙会舞台）
11月6日（日）翠松会（銕仙会舞台）



